

最後の晩餐

石川淳

石川
淳

最後
の
晩
餐

新
潮
社
版

昭和二十四年七月二十六日印刷
昭和二十四年七月三十日發行

定價貳百圓
地方
實價貳百拾圓

著者 石川 淳

發行者 東京都新宿區矢來町七一番地
佐藤義夫

發行所 東京都新宿區矢來町七一番地
株式會社 新潮社

電話九段(33) 八一四四四
振替東京八〇八三八
番八九八七六

最後の晚餐

目次

雙美人

五

最後の晚餐

五七

かれらの酒杯

さかづき

一〇三

懸想文賣

一五五

藤衣

一九七

おとし
ばなし

堯舜
李白

二五二

二七七

最後の晩餐

雙
美
人

昭和二十三年五月

黒の上著の胸にさした黄水仙、これはほんものの花で、切りたてのびんとしたのが、金色のブローチの、いや、これもほんものの金らしい、きらきら光るのに映つて、抜き出た頸すぢの一きは白く、電燈の下にうつむきながら、ティブルのはしに左の脇をついたまま、顔が影になつてまともに見えないのは、今中華料理の皿に箸をつけてゐるさいちゆうのせゐばかりではなく、ふつとその手をとめて、何やら思案にくれてでもゐるといふそぶり、襟に垂らした編毛の房の、その一つが耳たぶの上に垂れさがつて來て、うごきの止まつた振子のやうに、重いしづもりであつた。

「どうした。」

やさしく聲をかけたつもりなのが、つい相手の肩さきを突きでもしたほどの口調に

なつて出た。その口調をまぎらすやうに、葉山利吉はのみかけのビールをぐつと干して、向ひあつてゐる妻のはうを上目でうかがふと、さきはそれほどには應へないふうで、茫とした眼をそらしながら、

「齒がいたいのだ。」

あきらかに、うそとしか聞えないやうな、力の無いつぶやきである。どうしたのだらう。どうも先刻から、ダンスホールで踊つてゐた途中から、何となく龍子の舉動がをかしくなつて來てゐた。土曜日の夕方、ちやうど三月の月給日にあたつてゐたせゐもあつて、利吉のつとめてゐる丸ノ内の銀行のひげきはにたづねて來た龍子で、いっしよに行つたダンスホールの、こいつも當節では安手のあざとい仕掛だが、久しぶりの夜のにぎはひに浮かれて、はじめははしやいでゐたのに、それが急に氣が抜けて、抱く腕の中に肩からしをれて、床に立つに堪へない足のみだれの、やがてその場から早めに外へすべり出た前後のふしぶし、とんと腑に落ちない興ざめであつた。しかし、

かへりみちに寄つたここ銀座裏の中華料理店で、客のたてこむ中にあつては、あたり
のてまへ、利吉は高い聲も出しかねて、すねたとさへ見える妻の返事にいらいらしな
がらも、もう一度「どうした」と、のぞきこむやうにして問ひつめたとき、さらに意
外な返事がそこに待つてゐた。

「あたし、今夜うちにかへらない。」

きつばりさういつて、ふりあげた顔の、鼻すちあをじろく冴えて、ただ眼のふちが
濃い紅でもぬつたかと思えるまでにきはだつて赤く、うつろにひらいた瞳から、とた
んに、ぼろぼろと涙が落ちた。いけない、手がつけられない。利吉はあわてて、しか
しさりげなく、つと席を立つて、龍子をうながしてその店を出た。

暗い裏通の、街路樹のかげをあるきながら、

「おい、どうしたんだよ。どうして急に……さうなんだ。わけが判らない。わけをい
つたらいいぢやないか。」

組んだ腕をかく引きたてて、こどもをすかす調子であつた。それでも剛情にだまつたまま、五六間あるきつづけたのが、びたりと立ちどまつて、

「いふわ。」

腫にはもう涙は無かつた。

「あのひと生きてるの。」

「え。」

すぐにまたあるき出して、無言であつた。無言が説明であつた。

「あのひとつていふのは、きみの元のひとのことか。」

「ええ、生きてかへつて來てるの。」

「どこで逢つた。」

「さつき、ホールで。」

「踊つてゐたのか。」

うなづきながら、ふらふらとして腕の中にもたれかかつて來たが、さつと身をかへしてその腕から抜けた。

「さうか。それで、挨拶した。」

ううんと、あたまを振つてみせた。

「向うでは氣がついたやうすはなかつたのか。」

「氣がつかなかつたにちがひないわ。遠くにはなれてゐたから。」

「ふむ。」

今度は利吉が無言になる番であつた。

「眞赤なイヴニングをきて踊つてたひとがゐたでせう。」

あとおもひあたつたが、わざと、

「ダンサー。」

「いいえ、お客で。あなた、ときどきそのはうを見ていらしたぢやない。ご存じの

かた。」

「いや。さういへば、ひどく派手ななりをしたやつがゐたつけ。それが……」

「あの女のひとと同伴で踊つてゐたひと。」

「あ、あれがさうか。」

「お氣がつきになつた。」

「いや……あぶない。」

自動車がまちかを掠め通つた。土橋の角の舗道をわたりかけてゐたところであつた。利吉はとつさに龍子の腕をとつて、いそいで駆けぬけて、つい新橋の驛のまへ、ひとごみにまぎれこむと、口をきくひまもなく、地下道におりて、わーつと押されて、地下鐵の車内に押しこまれるにまかせた。雑鬧は龍子に「うちにかへらない」といふすきをあたへなかつた。家は澁谷であつた。

利吉がはじめて龍子を知つたのは、いくさがをはつてから二年目の春、今からまる

一年まへで、そのきつかけもやはりダンスに縁があつた。某銀行の頭取船津正久が娘正子の結婚披露のために、もとの鎌倉の別荘、今は本宅になつてゐるその家にひとびとを招いたとき、晚餐のあとがダンスになつて、踊る仲間に利吉も龍子もまじつてゐた。利吉は正久の甥でもあり、げんにその銀行の丸ノ内支店につとめてゐるあひだからなので、この席に列するのは當然と見られたが、龍子はいつたい何の縁故でここにあらはれたのか、いかなる素性のものか、利吉は知らず、他のたれも知らないやうすであつた。といふのは、龍子は、いや、そのときの名の知れない女は主人の正久とばかり踊つてゐて、一をどりすむとひとり隅のはうに引きさがつてしまつたからである。正久は大むかしのロンドン仕込みとかいふことで、老人に似合はずたしかなステップであつたし、またいかにも財界の名士らしい貫祿を保つた押出しであつた。その相手に立つて、逆に引きまはすやうな足さばきの、座中にすぐれてたくみであつたばかりでなく、ひとにおちない態度で、女にしては大柄な、デコルテの肩の照るほど

に白くゆたかなのがみなの眼をひいたが、寄つつきにくいふせいに、すすんで申込をするものもないうちに、利吉がふらふらと床をよこぎつて、向うの隅にゐる龍子のまへにちかづくと、ひくいおじきこそ慇懃ではあつたものの、だいぶ酔つてもゐたせゐか、むすど強引に手をつかんで、廣間のまん中に引すり出して、一氣にくるくると踊つた。踊はおとらずあざやかであつた。そして、その別れぎはに、つい去らうとする龍子の手をあまりに強くにぎりしめてゐたので、龍子がちよつとよろめいたのを、利吉はかろく受けとめて、とたんにひざまづいて、その手に接吻した。それがきざつばく見えなかつたのは、しせんの成行に依るしぐさであつたからだらう。大喝采であつた。そのときから結婚まで、一ヶ月とかからなかつた。この一ヶ月のあひだに、龍子の身の上についておほよそのことは知れたが、ひとの豫想に反してダンサーの履歴はもたず、どうやら良家の出といふうはさで、現在では船津正久がごく最近に雇つた祕書であつた。すでに美貌の女祕書だとすれば、銀行頭取と職務以外になにか關係のあ